

博士論文の要約

論文題目：薬物依存症者のロールシャッハ反応の特徴
—名古屋大学式ロールシャッハ技法を用いた覚せい剤依存症者と危険ドラッグ依存症者の
比較—

氏名：松井一裕

論文内容の要約

近年のわが国の主な違法薬物として、覚せい剤と危険ドラッグが挙げられる。特に、覚せい剤は精神科臨床において最も問題となっている。

覚せい剤は戦後以降、わが国において長年にわたり流行している物質である。近年においても、全国の精神科を有する医療施設に関する調査で、対象者の1年以内の「主たる薬物（現在の精神科的症状に関して、医師が臨床的に最も関連が深いと判断した薬物）」として、覚せい剤は、2018年（松本・宇佐美・船田・村上，谷淵，2019），2020年（松本他，2021）で、アルコール以外の薬物関連（使用）精神障害患者が使用した薬物の第1位となっている。危険ドラッグは2014年の調査（松本・高野・谷淵・立森・和田，2015）において「過去1年以内に主たる薬物の使用が認められた者」が関わった薬物の第1位であった。

本邦の薬物依存症に対するロールシャッハ法研究は近年の研究報告数が少なく、流行状況を反映した薬物依存症に対する投影法研究は不足している。そこで、本論文では、第1章にて、近年の薬物情勢を概観し、覚せい剤と危険ドラッグの精神症状をまとめるとともに、国内外の薬物依存症に関するロールシャッハ法研究の研究動向を調査した。次に、第2章では、覚せい剤依存症と危険ドラッグ依存症のロールシャッハ法の形式分析の特徴を明らかにし、第3章では、覚せい剤依存症と危険ドラッグ依存症の感情カテゴリーの特徴を、第4章では、覚せい剤依存症と危険ドラッグ依存症の思考・言語カテゴリーからみた特徴を検討した。さらに、第5章では、覚せい剤依存症と危険ドラッグ依存症の事例分析を行い、プロトコルを詳細に検討した。最後に、第6章では、第1章から第5章までの総合考察を行い、本研究の今後の課題と限界について論じた。

【第1章 薬物依存症の概要と投影法研究の動向】

第1章では、わが国と海外の薬物情勢について概観し、近年わが国で流行した覚せい剤と危険ドラッグの有害作用と精神症状について整理した。先行研究からは、覚せい剤であっても危険ドラッグであっても精神病症状の出現が指摘されていた。さらに、わが国と

海外の薬物依存症に関するロールシャッハ法研究を概観した。わが国の薬物依存症に関するロールシャッハ法では覚せい剤や有機溶剤を使用した者に対するロールシャッハ法の研究が行われており、海外ではヘロインやコカインを使用した者に対する先行研究が多かった。女性の薬物依存症者のロールシャッハ法を研究するうえで、性被害の影響を考慮する必要があった。また、物質依存の背景として、自己愛の発達の障害が薬物の使用につながる点にも触れた。過去の知見からは、薬物依存症のロールシャッハ法には、対人関係の問題を抱えている点や、現実吟味能力が低い点、感情統制の問題がある点が特徴として挙げられていた。

【第2章 覚せい剤依存症と危険ドラッグ依存症のロールシャッハ法上の特徴：形式分析を中心に】

第2章では、覚せい剤と危険ドラッグをそれぞれ主に使用した薬物依存症者のロールシャッハ法の形式分析を中心に比較検討した。ICD-10にて「薬物依存症」の診断基準に該当した対象（18名）を、覚せい剤群（8名）と危険ドラッグ群（10名）に分けた。スコアリングは名大法を中心として行った。

覚せい剤群と危険ドラッグ群では危険ドラッグ群の方が年齢は低かった。ロールシャッハ法の形式分析では、どちらの群も反応数は平均的な数値であった。今回の対象者全体で F+%、R+%は両群ともに 50%台だった。対象者全体の動物反応の割合は平均的であり、動物反応の割合が多いとはいえなかった。両群とも Hd/反応（非現実人間部分反応）は H 反応（人間反応）に次いで出現率が高かった。特に覚せい剤群で、カード I の Hd/反応の出現率が高かった。今回の対象者の傾向として、必ずしも CF 反応や C 反応が FC 反応より多いとはいえなかった。反射反応 (FR+rF) は覚せい剤群のみに出現していた。現実吟味能力については先行研究と同様の結果であったが、外的統制は必ずしも先行研究の知見と合致するわけではなかった。

【第3章 覚せい剤依存症と危険ドラッグ依存症のロールシャッハ法上の特徴：感情カテゴリーを中心に】

第3章では名大法の感情カテゴリーを中心に、スコアの検討と考察を行った。対象は、第2章と同じである。覚せい剤群では不安だけでなく、依存的な感情を伴った反応が、危険ドラッグ群では不安に関連する感情が反応として産出されやすいかどうかを調査し、覚せい剤群と危険ドラッグ群の感情カテゴリーの特徴を論じた。

Anxiety%（不安感情）をみると、危険ドラッグ群（36.8%）は覚せい剤群（21.5%）より有意に高い数値を示していた。Dependency%（依存感情）は覚せい剤群（21.7%）が、危険ドラッグ群（12.0%）より、有意に高かった。また、Positive feeling%（快的感情）に関しても、覚せい剤群（32.2%）は危険ドラッグ群（17.1%）より有意に出現率が高かった。覚せい剤群の Positive feeling の下位カテゴリーのスコアでは、Prec 反応が多く、

Anxiety の下位カテゴリーでは Athr 反応が最も多かった。危険ドラッグ群の Anxiety の下位カテゴリーでは Athr 反応だけでなく、Aev 反応、Adis 反応、Agl 反応などが幅広く出現していた。覚せい剤群の脅威を伴った反応は精神病を伴う症状や妄想との関連が疑われた。危険ドラッグ群では脅威以外に抑うつ的な感情を抱いている点を指摘した。

【第 4 章 覚せい剤依存症と危険ドラッグ依存症のロールシャッハ法上の特徴：思考言語カテゴリーから】

第 4 章では、名大法の思考・言語カテゴリーを中心に、第 2 章と第 3 章と同様の対象に検討を行った。①覚せい剤群と危険ドラッグ群の思考・言語カテゴリーの出現傾向と思考障害のあり方、②森田他 (2001) の対人関係 (コミュニケーション機能) の視点を取り入れた思考・言語カテゴリーの知見をもとに、それぞれの群の対人関係の特徴を明らかにすることを目的とした。覚せい剤群では、半数の対象に⑨Autistic Thinking (自閉的思考)、⑩Personal Response and Ego-boundary Disturbance (個人的体験の引用・自我境界の障害) が出現していた。これらの大カテゴリーが頻出していることは、精神病圏の特徴を表し、知覚内容の保持と連想過程の障害を示唆する。危険ドラッグ群では、6 割に⑥Associative Debilitation and “Labile Bewusstseinslage” (連想の衰弱・不安定な意識状態) が認められた。また、⑧Arbitrary Thinking (恣意的思考) の大カテゴリー中、arbitrary response は危険ドラッグ群の半数に出現しており、思考の恣意性や知覚の保持や連想過程の段階での障害を示すスコアが確認された。対人関係の特徴では、危険ドラッグ群は Communicative Elaboration の出現数が覚せい剤群より多く、潜在的には思考障害の病理を抱えていても、疎通性は覚せい剤群よりも保たれていると考えられた。

【第 5 章 覚せい剤依存症と危険ドラッグ依存症のロールシャッハ法を中心とした個別事例と継列分析】

第 5 章では、性被害を受けた覚せい剤依存症の女性、危険ドラッグ依存症の男性、危険ドラッグ依存症の女性の 3 事例について、それぞれ詳細なプロトコルの分析を行った。

性被害を受けた覚せい剤依存症の女性の事例では contamination が出現していただけでなく、プロットと自己の体験的な距離が混乱した反応があり、精神病圏の反応が目立った。危険ドラッグ依存症の男性の事例では、Geo 反応が多く知覚が曖昧で、反応内容の浮動性や恣意的な傾向が認められた。その場で受けた刺激を無視できない傾向があり、薬物使用の動機との関連が疑われた。危険ドラッグ依存症の女性の事例では、Pure H 反応がない点、細かな点に着目しやすい傾向があり、刺激の強いカードでは防衛が失敗しやすい状態が示された。ロールシャッハ法のプロトコルと生活史を詳細に検討することで、クライエント個人を総合的に理解する一助となる可能性を論じた。

【第 6 章 総合考察】

第6章では、第1章から第5章までを総括し、覚せい剤依存症と危険ドラッグ依存症のロールシャッハ法の特徴について、総合的な考察とまとめを行った。

現実吟味能力については低い結果であること、感情統制についてはFC:CF+Cの比率のみでは適切に評価できない可能性がある点を指摘した。対人関係の評価として、非人間反応については部分的な反応内容の割合が多く、細かな点に着目しやすい過敏さを抱いていることに触れた。ロールシャッハ法の活用により、薬物依存症者の病理的な側面だけでなく、本人の抱えている障害や生活をする上での困難な点を評価しうる点を指摘した。最後に、今後の研究の課題と展望について論じた。